



当遺跡が立地する三福寺町は、大八賀川右岸にあつて、高山市内旧市街地の北方にあたり、北山という小山を間にはさんでいる。「三福寺」という地名は江戸・金森時代以後のことで、それ以前は三仏寺と称されている。後代の諸文献には、古い時代に三仏寺という寺院があつたと記される。元禄水帳には、「どうのまえ」「じょうど」「もんぜん」等の小字が見え、布目瓦が周辺畑地や水田から多く出土している。

中世以降は、寺を含めて裏側の山に三仏寺城という山城があつた。『飛州志』『斐太後風土記』では、三仏寺城跡と三仏寺が混同されて、山上に寺があつたように記されている。郷土史家押上森蔵は実地調査をして、三仏寺が立地条件から考えても山上では適当でなく、山麓の現遺跡指定地が寺域と推定したが、卓見であるといえよう。

瓦類の発見は数回あり、昭和3年道路改修時に軒丸瓦が10数個出土、何個かが地元に残る。昭和43年、森本正雄家裏の電柱工事の際に瓦が多く出土した。過去に採集された軒丸瓦を図2に掲載する。また、平成4年に発掘調査された際に出土した遺物は、図3～5に記した。図3の軒丸瓦は、外縁素文有子葉単弁八葉、蓮華文、中房の蓮子は中央に1個、回りに4個配され、蓮弁内に波状を呈する子葉がある。図4～5平瓦は4種類に分類され、

3～6が凸面格子タタキ、

7～10が凸面格子タタキで目が比較的細かい、

11～17は凸面斜格子タタキ、

18～23はその他各種で、18は凸面平行タタキ、19、20が凸面ヘラケズリ、21が凸面縄タタキ、22、23が粗い凸面平行タタキである。①～④類とも桶巻痕跡が見られ、厚さは21～25mm、26～28mmと厚く焼成は軟良いろいろ。

三仏寺瓦の窯は松之木町日面原(ひおもばら)古窯跡ほか5箇所が推定されているが、まだ確証は得られていない。

三仏寺の成立から終末は全く不明であるが、出土丸瓦からみて白鳳期の成立、平安時代末には三仏寺城との関連をもち、以後廃絶した。

出典文献

1. 『高山市内遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会 1996
2. 田中彰「三仏寺廃寺」『古代仏教東へ ― 寺と窯』第9回東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会 1992
3. 八賀晋「飛驒の古墳と古代寺院」『古代の飛驒』飛驒国府シンポジウム資料、国府町教育委員会 1988
4. 荒川喜一『大八賀村史』大八賀財産区 1971



0001_北から



0002_北から



0003_北から



0004_北から



0005_北から



0006_北から



0007_南から



0008_南から



0009_南から



0010_南から



0011_南から



0012_南から



0013_西から



0014_西から



0015_西から



0016_西から



0017_西から



0018_遠景



0019_遠景



0020_遠景



0021_遠景



0022_遠景



0023_遠景



0024_遠景



0025_遠景



0026_遠景



0027_遠景



0028_遠景



0029_遠景



0030_遠景



0031_遠景



0032_遠景



0033_遠景



0034_遠景



0035_遠景



0036_遠景



0037_遠景



0038_遠景



0039_遠景



0040_遠景



0041_遠景



0042_遠景



0043_遠景



0044_遠景



0045_遠景



0046_遠景



0047_遠景



0048_遠景



0049_遠景



0050_遠景



0051_遠景



0052_遠景



0053_遠景



0054_遺構内



0055_遺構内



0056_遺構内



0057_遺構内



0058_遺構内



0059_遺構内



0060_遺構内



0061_遺構内



0062_遺構内



0063_遺構内



0064_遺構内



0065_遺構内



0066_遺構内



0067_遺構内



0068_遺構内



0069_遺構内



0070_遺構内



0071_遺構内



0072_遺構内



0073_遺構内



0074_遺構内



0075_遺構内



0076_遺構内



0077_遺構内



0078_遺構南から



0079_遺構南から



0080_遺構南から



0081_遺構南から



0082_遺構南から